

自己評価と高齢者像との関連

芝崎 良典

The correlation between perceived-aged person and self-evaluation

Yoshinori Shibasaki

マズロー (1987) は、自己を尊重している人間の知覚は歪曲されることは比較的少ないが、そうでない人間の知覚は願望や希望により歪曲されると考えている。本研究の目的は、自己評価が知覚に及ぼす影響について検討することであった。専門学校生 (N=73) に自己評価尺度 (溝上, 1999) および高齢者像の評定を求めた。自己評価の高低によって被験者をグループ化し、群間に高齢者像にちがいがみられるか検討した。結果、自己基準による自己評価と高齢者像の間には関連がみられなかった。しかしながら、社会基準による自己評価と高齢者像の間には関連がみられ、自己の長所を高く評価し短所を低く評価する被験者は、長所・短所ともに低く評価する被験者よりも高齢者を「小さい」ものとしてとらえることがわかった。また、自己の長所を高く評価し短所を低く評価する被験者は、長所を低く評価し短所を高く評価する被験者に比べて、高齢者を「やさしい」ものとしてとらえることがわかった。これらの結果は、自己評価がものの知覚に影響を及ぼすことを示唆する結果である。

Key Words: aged person image, self-evaluation, perception

問題

本研究の目的は、自己評価が知覚に及ぼす影響について検討することにある。自己評価とは一般に人が自分をどのような人間であるかについて考えていることをいう。溝上 (1999) は肯定性次元 (社会-自己基準) と否定性次元 (社会-自己基準) との別を考慮した自己評価尺度を作成している。この尺度は、肯定性次元と否定性次元、社会基準と自己基準とを組み合わせた4つの下位尺度 (社会肯定、個人肯定、社会否定、個人否定; 表1参照) から構成されており、

表1. 溝上 (1999) の自己評価尺度の下位尺度の例

構成概念	項目例
社会基準肯定	私は、自分のことを周囲の人とは異なる優れた存在だと思います。(他6項目)
自己基準肯定	私は、理想通りではないが、自分というものが好きです。(他6項目)
社会基準否定	何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思います。(他6項目)
自己基準否定	私は、時々自分自身が嫌になるときがあります。(他6項目)

さらに尺度ごとに得点が高いか低いかというちがいを設けるため、2（社会肯定）×2（個人肯定）×2（社会否定）×2（個人否定）より、各調査対象者は16のタイプのいずれかに振り分けられることになる。例えば、社会肯定と個人肯定の得点が高く（H; highの意味）、社会否定と個人否定の得点が低い（L; lowの意味）場合はHHLLと表記され、逆に、社会肯定と個人肯定が低く社会否定と個人否定が高い場合はLLHHと表記される。

HHLL群は個人的にも社会的にも自己充足している群であり、LLHH群は個人的、社会的にも自己に対して不満をもっている群であるといえよう。マズロー（1987）は自己実現的人間の特徴として、「安全、所属、愛、地位、自己尊重の欲求については既にそれらは満たされている」（p. 301, マズロー, 1987）という特徴を挙げているが、この特徴は溝上（1999）の尺度から分類されるHHLL群の示す特徴と同じと見てよく、HHLL群はマズロー（1987）のいう自己充足した人間であると言ってよいであろう。実際、自己評価尺度とYG性格検査との関連を調べた溝上（1999）の研究の結果からは、HHLL群は抑うつ性や劣等感が低く、活動性や社会的外向性の高いことが分かっている。一方、LLHH群は抑うつ性や劣等感も高く活動性も社会的外向性も低いことが報告されていることから（溝上, 1999）、LLHH群は自己充足したとは言えない群であるといえよう。

マズロー（1987）に従えば、自己充足していない人間の知覚は自己充足している人間の知覚に比べて歪みが大きいと考えられる。すなわち、自己評価の高い者と低い者とは、同じものを見てもそれに対する評価に差があると考えられる。芝崎（2003）は自己評価と子どものとらえかたとの関連を検討するために、9つの形容詞対を専門学校生に提示し、「子ども」という概念から受ける印象について、項目ごとに評定を求めた（図1）。また、同時期に、溝上（1999）の自己評価尺度に関し評定を求めた。子ども像と自己評価との関連を検討したところ、自己基準による自己評価と高齢者像との間には関連がみられなかった。しかしながら、社会基準による自己評価と高齢者像の間には関連がみられ、自己の長所を低く評価し短所を高く評価する被験者（LH）は、他の被験者（HH, HL, LL）に比べて、子どもに対し否定的なとらえかたをしていることがわかった。芝崎（2003）の調査結果では、9対中、群間で有意な差があったのは社会基準では4対、個人基準では1対だけであった。これは、調査対象者であった青年には子どもと接する経験が少なく、評定する対象に対して明瞭なイメージが形成されていないためであると考えられる。そこで、本調査では、介護施設での実習後に高齢者に関するイメージを評定するよう求め、それらの評定値と自己評価との関連について検討を行うことにした。

なお、前述した通り、溝上（1999）は社会基準と自己基準の2つの基準を組み合わせ、調査対象者をタイプ分けしている。このように変数を組み合わせるには、2変数が相互に独立した変数である必要がある。しかしながら、溝上（1999）自身も指摘しているように、自己基準は社会基準に内包される基準であり、自己基準と社会基準といった変数を独立した変数と考えることは難しい。2変数が独立であるとの想定ができない以上、2変数の組み合わせから調査対象者をタイプ分けすることはできない。そこで、本研究では、芝崎（2003）と同様、社会基準と自己基準を組み合わせず、それぞ

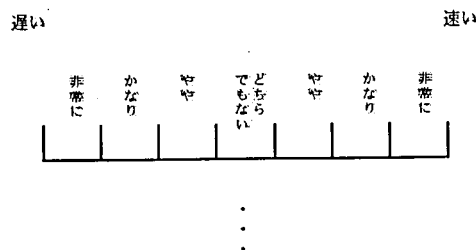


図1. 子ども像の評定に用いた形容詞対の具体例

れの基準ごとに調査対象者をタイプ分けし、それぞれの基準でタイプ分けされた群の間で高齢者のイメージにちがいがあ
るか否かについて分析を行うことにした。

方法

調査時期 2002年2月。

調査対象者 H県内の保育者および介護士養成課程に在籍する専門学校生73名。全て1年生であった。

自己評価尺度 溝上(1999)の作成した自己評価尺度を用いた。肯定性次元における社会基準項目と自己基準項目、否定
性次元における社会基準項目と自己基準項目はそれぞれ7項目であり、合計28項目であった。評定は7件法で行った。

高齢者のイメージの評定 予備調査とした事前に調査対象者に“高齢者”という言葉から連想する形容詞を自由に書き
出すよう求め、それらをもとに14の形容詞対を作成した。形容詞対は、「遅い-速い」、「弱い-強い」、「おろかしい-か
しこい」、「せかせかした-おっとりした」、「細い-太い」、「暗い-明るい」、「うるさい-静かな」、「かたい-やわらか
い」、「こわい-やさしい」、「不便な-自由な」、「軽い-重い」、「みにくい-かわいい」、「激しい-おだやかな」、「小
さい-大きい」、「きたない-きれい」であった。

手続き 評定は一斉に行った。自己評価尺度と高齢者のイメージの評定は別々の日に行なった。

結果

自己評価タイプの作成 溝上(1999)に従って、自己評価の各下位尺度の得点が絶対得点の50%以上を高群(H)、
50%以下を低群(L)と分類した。さらに、自己基準・社会基準の2基準ごとに、肯定的評価と否定的評価の高低の組み
合わせから、HH、HL、LH、LL群の4群に分類した。HH群とは、肯定的評価、否定的評価ともに高い群であり、HL群と
は肯定的評価が高く否定的評価の低い群であり、LH群とは肯定的評価が低く、否定的評価の高い群であり、LL群とは
肯定的評価、否定的評価ともに低い群である。

社会基準による自己評価タイプと高齢者像

高齢者のイメージに関して、社会基準によって分けられた各群のプロフィールを図2に示した。HH、HL、LH、LL群間
で、高齢者のとらえかたにちがいがあ
るか否かを調べるために、高齢者のイメージの15項目それぞれについて群のち
がいを要因とした順位によるクラスカル・ウォリス分散分析を行った結果、「小さい-大きい」、「こわい-やさしい」の
2対で群間に有意な差があった。また、「汚い-きれい」の対では群間の差が有意傾向を示した。その他の対については
両群に差はなかった。

「小さい-大きい」の対で群間に有意な差があった($H(3, 54) = 9.26, p < .05$)。ライオン法による下位分析を行った結
果、HL群はLL群より評定値が低かった($p < .01$)。すなわち、HL群はLL群より高齢者を小さいものにとらえている
ことがわかった。その他の群間には差はなかった。

「こわい-やさしい」の対で群間に有意な差があった($H(3, 54) = 8.70, p < .05$)。ライオン法による下位分析を行っ
た結果、HL群はLH群より評定値が高いことがわかった($p < .05$)。すなわち、HL群はLH群より高齢者をやさしいも
のとしてとらえていることがわかった。その他の群間には差はなかった。

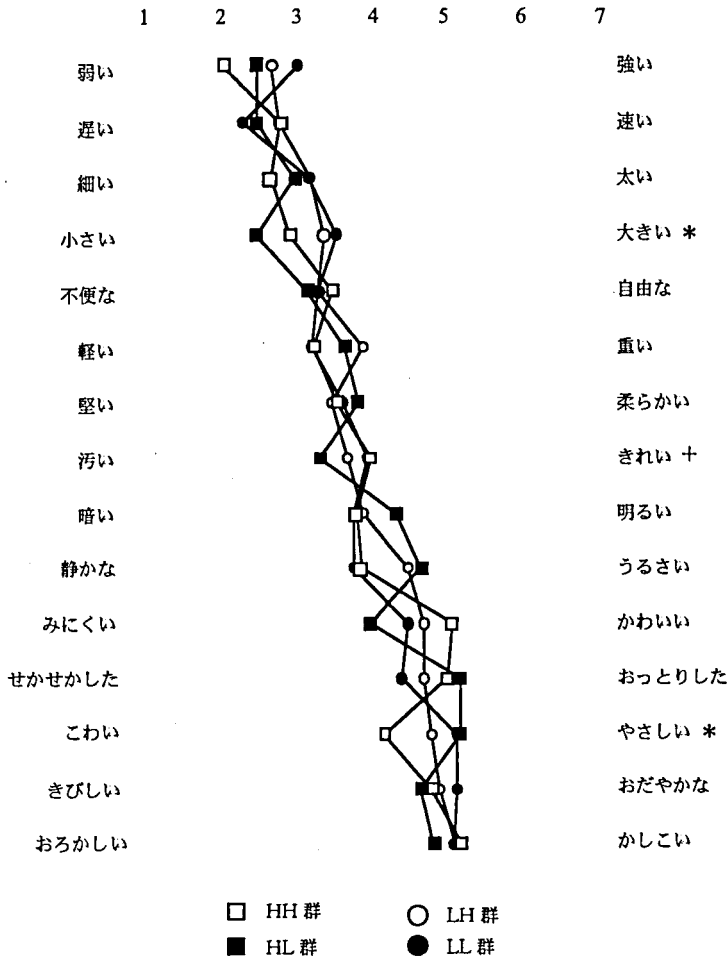


図2. 社会基準による各群の高齢者のイメージ

注：アスタリスクは群間の平均値の差が有意水準 ($p < .05$) に達したことを示し、マイナスは平均値の差が有意傾向 ($p < .10$) に達したことを示す。

「汚いーきれい」の対で群間の差が有意傾向を示した ($H(3, 54) = 6.77, p < .10$)。試みに、ライアン法による下位分析を行った結果、LH 群は LL 群より評定値が低い傾向があった ($p < .10$)。すなわち、LH 群は LL 群よりも高齢者を汚いものとしてとらえる傾向のあることがわかった。

自己基準による自己評価タイプと高齢者像

高齢者のイメージに関して、自己基準によって分けられた各群のプロフィールを図3に示した。HH, HL, LH, LL 群間で、高齢者のとらえかたにちがいがあるか否かを調べるために、高齢者のイメージの15項目それぞれについて順位によるクラスカル・ウォリス分散分析を行った結果、どの項目においても群間に差はなかった。

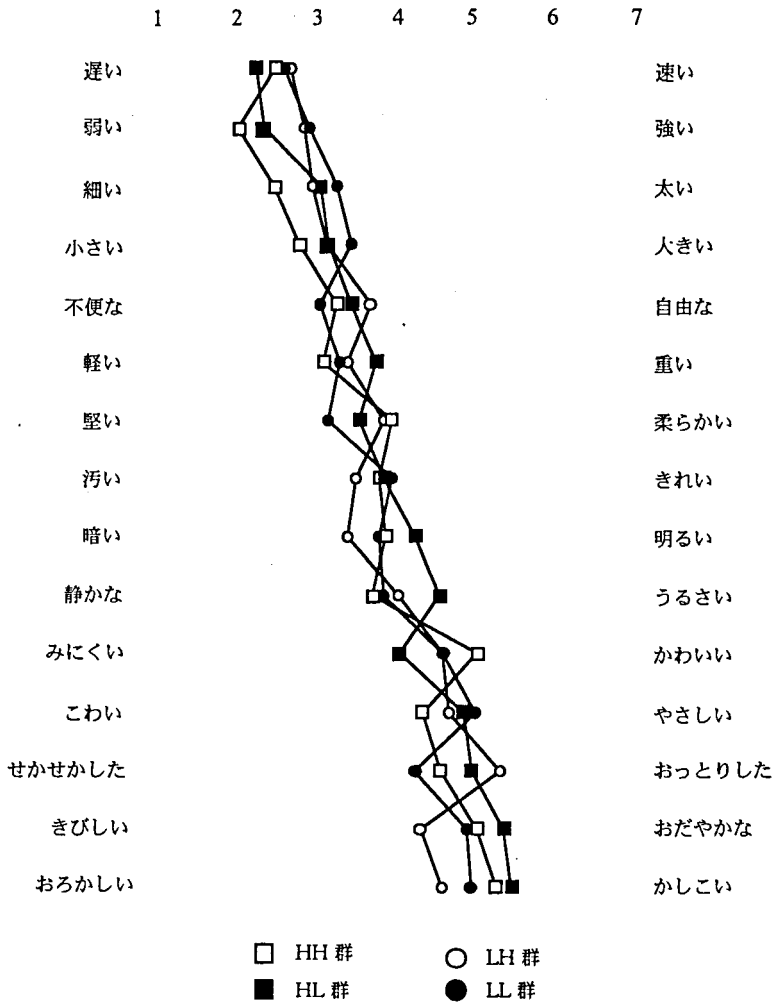


図3. 自己基準による各群の高齢者のイメージ

考察

本研究の目的は自己評価タイプのちがいと高齢者のイメージとの関連を調べることであった。自己基準によって調査対象者をタイプ分けした場合、群間で高齢者像にちがいはみられなかった、子ども像を扱った芝崎 (2003) の調査結果においても、9つの形容詞対のうち自己基準による自己評価と関連があったのは1対のみであった。これらの結果より、自己基準による自己評価のちがいはものの知覚にあまり影響を及ぼさない可能性が考えられよう。

社会基準によって調査対象者をタイプ分けした場合、「汚い-きれい」の対に関して、LH群は他の群よりも高齢者を「汚い」ものとしてとらえる傾向があった。子ども像を扱った芝崎 (2003) の調査結果においても、LH群は他の群に比べて子どもをうるさく、軽く、また、汚いと評価する傾向があった。以上の結果は、長所を低く評価し短所を高く評価する者 (LH群) は、他者を評価する際にもネガティブな評価をする傾向があることを示唆している。

また、本研究では社会基準による評価と自己評価による評価とでは、ものの知覚に影響する側面が異なることが示唆されたが、社会基準による評価は、どういった環境で育ち、どのような人と一緒に生活や仕事をするかによって異なってくることが予想される。すなわち、調査対象者の生育環境や勤務する職場の物的環境や人的環境のちがいによって社会基準による自己評価にちがいが生じ、その結果ものとのとらえかにもちがいが生じる可能性が考えられる。同様に、ものとのとらえかたにしても、調査対象者のそのものへの関わる程度によって、ちがいが生じてくる可能性がある。例えば、核家族で育ち高齢者と接する経験がない人と高齢者と同居している人とは、高齢者像が異なってくる可能性は十分に考えられる。したがって、今後調査を行う場合、生育環境および家庭環境等の諸変数についての回答を求め、それらの変数と社会基準による自己評価との関連、あるいは、自己評価とものとのとらえかたとの関連を検討する必要がある。

引用文献

- 小口忠彦(訳) 1987 人間性の心理学 産業能率大学出版部 (Motivation and personality. 2nd ed. Harper & Row.)
溝上慎一 1999 自己の基礎理論 金子書房
芝崎良典 2003 自己評価と子ども像との関連 未発表論文

(指導教官：山崎 晃)